S-3

与那国島と沖永良部島の事例報告

山田真寛（国立国語研究所）
m-yamada@ninjal.ac.jp

1. やっていること

登壇者は、言語コミュニティが言語の記録保存と継承保存を主体的に続けられるようになることを目指して、与那国島と沖永良部島で実践研究を行っている。今回は与那国町教育委員会『どぅなんむぬい辞典』と、「言語復興の港」プロジェクトが制作した 4 冊の琉球語絵本、そして沖永良部島知名町中央公民館講座「しまむにサロン」を紹介する。

◆どぅなんむぬい辞典

（音声と）例文付きの与那国語辞典（v.s.単なる語彙集）、島民による編集委員会が毎月 1 回語彙収集・検討会（v.s.1 人の研究者・島民）、大辞典までに何回も出す方針、臨時採用職員として言語学者 1 名と若い島民 1 名を継続的に雇用し、データ収集や辞書データ管理技術を協働。

◆4 冊の琉球語絵本

与那国島、竹富島、多良間島、沖永良部島の民謡・昔話を元にした絵本。一般向け簡易文法概説を巻末付録として付し、記述研究の成果を言語コミュニティがアクセス可能なかたちで還元。特に与那国島と沖永良部島では、企画段階から言語コミュニティメンバーと協働し、制作過程を言語学的なトレーニングの場として利用。

◆沖永良部島知名町公民館講座「しまむにサロン」

2019 年度から通年で毎月 1 回 2 時間、対面とウェブ会議システムを併用し「市民科学者の育成」をテーマに開講。流暢な話者が主な受講生で、講義と演習で言語の覚え方・習い方・教え方（記録と調査の仕方、文法知識や知識差の理解など）を習得。受講生は小学校の特別講師として依頼を受けて、指導者として習得した知識を実践している人も。

2. 協働のモチベーション

登壇者が地域言語コミュニティと協働しているのは、合理的かつ必須だからである。研究成果の社会還元として評価される（＝登壇者がそのように報告することもある）が、それは合理的判断の上で行っていることが結果的にそうなっているだけで、目的ではない。

◆記録保存のためにも協働が合理的かつ必須

談話資料、辞書、文法記述はこの順に人手が必要であり、この順で専門知識が必要になる。したがって談話資料や辞書データの蓄積は、研究者が 1 人で取り組むよりも地域言語コミュニティもできるようになった方が、記録保存が効率よく進む。

◆継承保存のためにも協働が合理的かつ必須

世代間継承によって言語を残すことは、言語コミュニティメンバー一人ひとりの取り組み無くしては達成できない。日々の生活の中で彼らが継承保存の取り組みの優先順位を上げるためには、何らかの協働プロジェクトで研究者が継続的に働きかけることが合理的である。専門知識を総動員し、何年もかけて 1 人の調査協力者とやるのが合理的なことはあるかもしれないが、フィールドワーカーは「やらないということ」が持つメッセージに自覚的でいた方がよい。友だちが「自分たちのことばは無くなってほしくないけど、どうしたらいいかわからない」と言うとき、彼らだけで放置するよりも研究者である自分が入った方が実現確率が上がるなら、やらないという選択肢は無くなるのではないだろうか。

3. 次のフィールドワークからすぐできることのヒント

研究者および研究者の認知度を上げ、記録保存と継承保存を協働する言語コミュニティメンバーを増やすために登壇者が行っていることのうち、比較的簡単にできることをいくつか紹介する。